

米山梅吉記念館 館報

2005
(平成17年)

秋

Vol. 6



第2回太平洋地域大会
1928(昭和3)年

前列左から トム・サットン 米山梅吉

1928(昭和3)年7月、日本に朝鮮・満州を合わせた第70区が設けられ、米山は初代ガバナーに就任した。それまで日本の各クラブは直接国際ロータリーの監督下にあり、スペシャルコミッショナーが置かれていた。そしてその年の10月、第2回太平洋地域大会が東京で開催された。これは地区設定を要請した日本でのロータリーの発展を披露する場となった。

この大会は、当時のRI会長トム・サットン夫妻以下海外から100余名、日本からは首相をはじめ皇族も参加し、総勢568名という大規模なものになり、社会的にも大きな注目を浴びた。晩餐会、仮装舞踏会、お茶会、園遊会など華やかで温かいもてなしは参加者を大いに喜ばせた。



財団法人 米山梅吉記念館

館報第6号発行に際して

理事長 内藤成雄

米山記念館は春、秋の例祭を恒例としており、春は米山翁の忌祭、秋は館創立祭です。今年の秋は「遅ろう、米山梅吉の原点に」と題してシンポジウム開催を予定しています。日本のロータリーには米山を冠名にした2つの施設、車山米山記念奨学会と米山梅吉記念館があり、また、奨学会は全日本ロータリーが率いる巨大財団、目的は在日アジア地区からの留学生への育英事業、一方館は昨今の新館建設を機に漸く全国視座で認識された小財団、経費も運営も全く異なる組織ですが、一面子細に考えると心は共通項で結ばれていると思います。反日を国論統一のカードとするようなアジア国境間のギョクブの中で、在日留学生に国際融和を、ロータリーの精神を、言い換えれば米山精神を学び、会得して帰国、将来の指導者になって貰う教育的プログラムの必要だと思えます。そんな見地からシ

ンポジウムには宮崎奨学会専務理事、谷内同奨学会監事(元三井信託銀行副社長)、当館取組事務局長の御出席をお願いしてあります。谷内氏は此の度「点検 米山梅吉、日本のロータリークラブと信託業の創始者」(新風舎文庫)を出版されました。

本年は全国ネットの当館理事、評議員の改選年であり、9月から新組織による活動が始まります。全国各クラブの皆さま、特に米山委員の方々は奨学会と共に記念館へも視点を向けて、何卒御来館等に任務を拡大、御協力の程お願いいたします。

本年は全国ネットの当館理事、評議員の改選年であり、9月から新組織による活動が始まります。全国各クラブの皆さま、特に米山委員の方々は奨学会と共に記念館へも視点を向けて、何卒御来館等に任務を拡大、御協力の程お願いいたします。

本年は全国ネットの当館理事、評議員の改選年であり、9月から新組織による活動が始まります。全国各クラブの皆さま、特に米山委員の方々は奨学会と共に記念館へも視点を向けて、何卒御来館等に任務を拡大、御協力の程お願いいたします。

本年は全国ネットの当館理事、評議員の改選年であり、9月から新組織による活動が始まります。全国各クラブの皆さま、特に米山委員の方々は奨学会と共に記念館へも視点を向けて、何卒御来館等に任務を拡大、御協力の程お願いいたします。



就任ご挨拶

常務理事 井口賢明
(河津北RC)

この度、財団法人米山梅吉記念館の理事に選任され、また理事会で伊藤文平氏のあとの常務理事を仰せつかることになった。

常務理事は、米山梅吉記念館の日常の事務を処理するものと理解している。ここ2年ほど前任の伊藤氏の仕事をみていて、私ごとがきかすかという思いである。しかし、お引き受けした以上、記念館の意思の確実な実現と円滑な運営のため、非力ではあるけれども、努力したいと考えている。

自分の認識では、記念館として、ここしばらくの間、特別に大きな事業はないと思っている。ただ、情報化時代といわれる現在において、記念館、米山梅吉翁に関する情報を迅速、的確な方法で外部に伝えることは必要であろうし、それ以上にかんじて、記念館の目的を実現するかが重要であろう。

記念館の情報発信のことについていえば、記念館では、館報を年2回発行している。ロータリーの関係では、これを全国2340ほどの全クラブに送付している。問題は、それがどの程度見られ、読まれているかである。多くの人に目を通してもらい工夫が必要である。例えば、クラブおよび米山関係の委員会の委員長宛にして、会員に回覧を願うとか、

今、世の組織体は、多くがホームページを開設している。記念館では、まだこれを開設していない。やはりホームページを開設すべきであろう。しかし、何のためにこれを開設するのか、これにより何をしようとするのかというはつきりした目的を見定めることが必要となる。単に、他所もやっているからとか、ホームページを開設するだけが目的になってしまう。

このようなことを考えると、記念館の目的、仕事は何だろろうという記念館の存立の原則をしっかりと頭に入れておく必要がある。記念館の寄付行為の目的は、米山翁の記念とロータリー精神の普及である。米山翁とロータリーとの関係については、多くが知られてきている。しかし、まだまだ不十分な面があるかもしれない。これらの充実をもっとすすめることである。それと米山翁のロータリー以外のことについては、まだまだ分からないところが多い。例えば、実業界における活動、三井報恩会での貢献である。資料や情報の少ないなかで、困難なことであるが、手をつけなければならぬであろう。

米山翁のロータリー以外のことについては、まだまだ分からないところが多い。例えば、実業界における活動、三井報恩会での貢献である。資料や情報の少ないなかで、困難なことであるが、手をつけなければならぬであろう。

米山翁のロータリー以外のことについては、まだまだ分からないところが多い。例えば、実業界における活動、三井報恩会での貢献である。資料や情報の少ないなかで、困難なことであるが、手をつけなければならぬであろう。

米山翁のロータリー以外のことについては、まだまだ分からないところが多い。例えば、実業界における活動、三井報恩会での貢献である。資料や情報の少ないなかで、困難なことであるが、手をつけなければならぬであろう。



連日の真夏日、猛暑が続いた今年の夏でしたが、8月半ばを過ぎると風も秋づき未だ夏富士の姿ながら富士山頂には想いがそよぎ始めました。

祭旗、一部は早(ひでり)、そして又々宮城沖地獄、自然現象ならぬ政界も激震、近隣諸外国との感情不安等々目には見えない日々が続いています。全国のロータリアンの皆さま、お元気ですか、米山記念館です。館報第6号をおくるに際して日頃の御協力に対して感謝しながらご挨拶いたします。

昨年度の館主要行事の35周年記念行事も漸く終りました。その継続事業であった記念誌「私の人、米山梅吉の愛音」もようやく今年4月28日発行日として出版することができました。既に全国のロータリークラブには贈らしたにもかかわらず、幸い目下全国から「よい情報誌だ」との御好評をいただきました。その後の残部も御注文が続いております。

井口常務理事のご努力の賜で少なくともロータリーに關しては米山翁の愛音を主文及び資料編で御購読できたと思いい、これからの米山梅吉研究資料としていささかお役に立てたと思っております。

今、ロータリーは組織が肥大化し過ぎたためか、その組織の維持、大プロジェクトの完遂等に努力が注がれ、大切な初心、原点に還る精神が薄れてきたことを全ロータリアンの皆さまが一緒に危機として感じておられると思えます。その時この本の資料編を購読しますと米山翁を通して日本ロータリー黎明期の一途をひたむきな原点の言葉が今更のごとく蘇ってくるのを感じます。

今、ロータリーは組織が肥大化し過ぎたためか、その組織の維持、大プロジェクトの完遂等に努力が注がれ、大切な初心、原点に還る精神が薄れてきたことを全ロータリアンの皆さまが一緒に危機として感じておられると思えます。その時この本の資料編を購読しますと米山翁を通して日本ロータリー黎明期の一途をひたむきな原点の言葉が今更のごとく蘇ってくるのを感じます。

春季例祭



例祭挨拶 内藤成雄 理事長

■日時 2005年4月23日(土)
 ■会場 関米山梅吉記念館ホール

- 例祭
- 記念講演 演題 「米山梅吉のダラス行」
 講師 創立50周年記念誌委員長
 井口賢明 氏(沼津北RC)
- アトラクション ソプラノ独唱 田巻綾江さん
- 懇親会



ソプラノ独唱
 田巻綾江さん



講師
 井口賢明 氏



●記念講演●

●演題 米山梅吉のダラス行

一とく到大正7年元日のダラス行の「目的」をめぐって
 井口 賢明 氏 記念誌の編集を担当して

●講師 井口 賢明

記念誌の編集を担当して

【はじめに】

ただいまご紹介をいただきました井口と申します。私はロータリーに38歳の時に入りましたので、30年くらい経ちます。

今頃、たまたま記念誌の運営委員になったところ、記念誌の編集を担当せよ、と仰せつかりびっくりしました。しかし、私がクラブに入った以降ずっと、記念誌の副理事長松原謙一さんにお世話になりました。また、沼津北クラブは長崎クラブができるまで、記念館の事務局をつとめていました。そんな事を考え合わせるとこれも因縁かなと思っています。

そんなことで本当はもっと記念館のこと、米山さんのことを知らなければならなかったんですが、不知油で、まったく知らない、白紙の状態でした。私自身としては、もう少し内容のよいものができないかなという願望はありました。でも、それはそれとして自分の能力の中でやるしかない、と始めた次第です。

この本ができるまでに、理事長はじめ大勢の方からお話をいただきました。それから編集委員の方には大変ご苦勞をかけました。特にお名前をあげさせてもらえば、この本の印刷を担当した木内さん、本当に最後の最後まで、校正や校閲のことでまだ間に合いうかなというぎりぎりの時間まで無理をいたしました。このように木内さんはじめみなさんのご努力で今日を迎えられたわけです。

本の出版は非常に嬉しいものですが、怖いなということがあるのだ、気を遣います。編集委員の方、この学芸員の市川さんにも校正をお願いしているわけですが、今の段階ではそれほど間違いは見つかっていませんが、これからどんどん出てくるのではと恐れています。自分なりに気は遣ったつもりですけれど、そのあたりは後になってみないとわかりません。

初めの頃、『ロータリー日本50周年史』の小川節恵氏の本を見て、自分にはとてもこんなすごい文章は書けな

いな、と手がつかなくなりました。それから、原稿段階だと自分で読んでいて、うんうんと納得はするのですが、いざ印刷にはいって校正段階になりますと、自分の文章がとくに怪しくなります。自分自身の本ならこれでもう申したいと思うくらいだったのですが、そうもいきません。そういう落ち込みを今日までもみまわっています。

【編集の方針 1】

それは別として、今回の本の編集方針を私なりに考えました。勿論、編集委員会の了解を得た上でですが、1つは、できるだけ原資料にあたっていただきたいということです。

日本のロータリーでは、第1回の地区大会が昭和4年4月に京都で開催されました。そのときに卓話十戒というのが話題になったといえます。これは根本先生の『歴史背景』にもひかれています。そこには、「くどくどしんかも熱意を述べぬこと」、「開扉直前に白紙にかきおこすこと」とか「部員を落とさぬこと」とか「書いちゃいます。私は、この十戒というのはなかなかおもしろい、それとおなじだと思ひ、記念誌の中にもひいてみたい」と考えました。この卓話十戒の一番元になっているのが成木太一殿という方の『われらのつどい』という本だろうと思います。その本の中に、第1回地区大会、このとき米山さんがガバナーな人ですが、その2日目の懇親会のときにこのことが話題になったと書いてあります。私は、そのことが京都地区大会の記念誌に載っているのだらうと思つてました。ですが、そのことは書いてありませんでした。そして、私は、索引きとなるのも嫌だと思ひ、載せませんでした。

それから、自製活になるので気が引けるのですが、昭和10年内に入り、職員のロータリーは非常に輝きを放ちました。このとき、東京クラブの松井亮さんという方が、この方は貴族院議員だったのですが、貴族院でロータリーについてどう思うか政府の見解を私訴するということがあったそうです。これは『ロータリー日本50周年史』にも出ています。これは当然載れたいなと思ひ、早い段階で文章の中に取り入れていました。出版までには、松井亮という方が貴族院で話した内容を議事録で確認しなければいけないと思つていました。それでこの書だけではなかったのですが、国会図書館に行つて議事録を調べたけれどもちつとも出てこない。議事録が見つからないので、確認しないでも載せようかと思ひました。校正段階で知らないうちに、今度はこれだけの用件で国会図書館に行つて調べてみました。私の見たロータリー日本50周年史の年表はその時期が4月、実際は3月だったのです。この年表の月が違つていたので見つからなかった。松井氏が貴族院でロータリーについて質問し

たというのは『同窓ロータリー一月報』(昭和14.04)に、ある程度詳しい解説や記事があります。それで年月日をばっちりさせて探したら、ありました。記念誌の年表にもありますが、昭和13年2月14日に1回、その翌年昭和14年3月15日と23日に東京R.C.の予算委員会が質問をしています。聯合3回やっているとこのことです。これで私も安心してその文章をパスさせました。年表にもいれることができました。

このように、私としてはできるだけ元の資料を確認したいという考え方でやってきました。ただ実際それがどの程度成功しているかという点、100%とはいえない面があります。どうしても原資料を確認するのが困難な場合もあるわけです。ただ、他の方の書いたものを見ていて、直感的に、この方の資料はひいいても大丈夫だなとかますますいなくなるものだらうと思います。例えば、日本にロータリーができたのが1920年、大正9年。このいきさつについて原資料がはっきりしないという問題があると思います。東京クラブの道原植三さんがロータリーの友に「東京R.C.創立について」という文章を書いています。この方の文章は正確だなどという気がしていました。安心してひかせていただきました。

いずれにしても、自分で元の資料にあたることのできればよいのですが、なかなか当れない場合があるわけです。

【編集の方針 2】

それから自分でも無謀かなという気はしましたが、米山善吉さん、この記念誌に関連する資料を調査していきなさいという方針をたてました。

この点でロータリー関係の資料については多少お役にたつかなという感じがしなくてもありません。ロータリーの友は、昭和8年に創刊され現在90年くらい経っています。はじめ私は、その資料についてロータリー文庫で出している資料目録、この中に米山さんに關する資料をまとめてあるわけですが、これで処理をしようと思いましたが、ある編集委員の方から「いやまだいっぱいあるんじゃないの」といわれ、それではどうしようかと、編集委員のみなさんにお願いをし、ロータリーの友創刊以来50年分全部読んでもらいました。これは、自覚してよいのではないかと思います。編集委員みなさんのお手紙であります。必ずしも米山さんあるいは記念誌だけのことではなく、ある意味私の趣味みたいなところもありました。戦前のロータリーのことについても取り上げました。

ロータリーの友はこのように検索ができますが、その他の資料を集めるのは大変です。本誌は各地区、クラブの記念誌を撮らなければいけないのでしようが、それは時間的に不可能と思い、ロータリー文庫の目録

を使わせていただき、他の文庫・資料など目につくものを補充しました。

その中で、あまり知られていない本や資料がありまして、『米山善吉評伝』もそのひとつです。他の本にもあまり引用されていないと思います。『米山善吉伝』を著した佐々木博さんはこの『米山善吉評伝』というのを見ていたかな、という感じがします。今までの米山さんの特に出たところの部分が少し行き違いがあるもので、すから、検証しないでそのままだと取り入れるのはどうかと思ひ、資料編に掲げるだけにしておきました。私が見た資料では、この本を引用したものはないかなという感じがします。

もうひとつ同窓会図書館で見つけたのですが、米山さん連『ロータリー・クラブ』という20ページくらいの薄いパンフレットです。これも今まで見たことがなかった。昭和4年2月23日のロータリー記念日にラジオ放送したものをまとめたものです。これも今まで見たことがなかった。現在はこちらネットにより資料の検索が非常に楽になりました。同窓会図書館だけでなく他の図書館のものでも、米山善吉の著書と引けばポンと挙がってきます。ですからあまり苦労しているわけではないのです。

米山さんの主要な著作はこの記念誌にございます。ほとんどが初版本ですが、1冊『米山善吉文化と海洋兵学校』、これだけが初版本ではありません。

米山さんの著作の中で、私がつかっていて挙げなかったものがひとつあります。何人かが書いたものをまとめたもので、その資料が青森県の図書館にあるというわけですが、現物を確認しなかつたので、資料編に載せませんでした。

このように、方針としては米山善吉さん、米山善吉記念誌についての資料を調査してみようと思いましたが、それがどの程度成功しているかどうか、今後皆様方に検証していただくことになろうと思います。そんなことも含め今回の記念誌では、後に調べる方が後押ししやすいようにと思ひ、できるだけ往後で出所を示しておきました。



書 架 上 の 善 吉 翁

米山善吉氏のダラス行

【2回目のダラス行】

米山さんは、ダラスに2回行っていきます。1回目は、日本を大正6年10月15日に出、帰ってきたのが翌年の2月9日の朝です。もう1回、2回目は、昭和4年の5月末から6月はじめにかけてです。ただ、もう1回可能性があったと考えられます。というのは、米山さんが20歳でアメリカに行くと8年間このようにおられた。そのとき、8年もいたのだから南米の方に旅行した可能性はあるのではと考えられますが、その匂いはかきつけられません。そのときは多分行ってはいないかということになります。

2回という前提でお話をさせていただきますが、日本のロータリーに、昭和3年の7月から地区が設けられ米山さんが初代のガバナーになります。そして翌年の5月にガバナーとしてダラスの国際大会に行つた。これが2回目の昭和4年の5月28日から6月5日までダラス滞在中になります。このときの資料は、事務『東大東』という本などが豊富あります。このときは、ご子息の植三さんが慶応大学を出られて助手になり、イギリスの大学に留学されるということ、植三さんも伴って行った。

それから、米山さんは、ダラスの国際大会に出て、その帰りに各クラブに手紙を出しています。当時クラブが身つだつたろうと思ひます。各クラブに出した手紙の内容が一字一句同じかどうかはわかりませんが、その手紙が大抵クラブの会報に載っています。

大阪クラブには、4通出しています。大阪クラブの会報から引用したものを記念誌の資料編に載せておきました。これは読んでみると面白いし、資料的にもなかなかです。もうひとつ、この性質上、今回は載せられませんが、ダラスの国際大会に大阪クラブの生駒吉之助さんという方が行っています。生駒吉之助の方だろろうと思ひますが、非常に前後で、それこそ、当時の状況、この方の人物を彷彿とさせるものです。いつかの機会に紹介できるといいなと思ひます。

【1回目のダラス行】

昭和4年のときの資料はこのようにいくつかあるのですが、1回目のダラス行きの資料がなかなかないのです。大正6年10月15日に日本をでていたのですが、その行儀の中で、ニューヨークからダラスに行つた。大正7年の元日に、三井物産の福島善三さんの家をおすねしています。

私は、米山さんがこのときなぜダラスに行ったのか、本当はここに興味があつて居たのではないかと、しかし、ロータリーの関係では、行った目的よりも結果の

意味のほうが語り継がれています。私自身記念誌の編集を担当するまで、このことをしからなかつたのです。皆さんご承知でしょうが、おさらいの意味で、昭和の話をさせていただきます。



米山さん、大正7年の元日の朝、ダラスの福島善三さんと米山さんが共同してロータリーの設立に走つた、という文章があります。

私にすれば、願望的文章だと思ひます。背後のいるいななきつきがあつて、理由を話さず兵々になります。私が、私自身は、米山さんと福島さんの間でロータリーの語が出たあるいは例に出たということについて、疑問を抱いています。もう少し検証する必要があります。

ロータリーの語が出た、ロータリーの例に出たというのには、あながち根拠がないわけでもない、という代に、福島さんのご夫人がロータリーの友にダラス時代に米山さんがお話をしたことを話して、例にダラスとしてお話をしています。ですから多くのうようなことをいっています。ですから多くのうようなことをいっています。ですから多くのうようなことをいっています。ですから多くのうようなことをいっています。

昭和9年に発行された『ロータリー-さまさま』という種子があります。書かれたのは、東京クラブのメンバーで新聞記者だった伊藤正徳という人です。この種子では、大正9年に米山さんがダラスに行ったと書いてありますが、今では大正7年と誤認されているので、これは別として、この中にダラスを訪問したときに福島さんと米山さんがダラスロータリークラブの話をした、そして米山さんが共同してロータリーの設立に走つた、という文章があります。

私にみた限り、これが一番最初のもので、米山さんは、この本の序文を書いています。だから、米山さんの認知をうけていられるともいえるわけですが、そんなことで、これがすつと尾を引いていられる感じがなきにしも

あらずです。
先ほど話しました塩原三三さんの「東京京C創立について」の文章の中では、その辺を成めた内容になっていて、私としては、塩原さんの考えに与しなさいと考えておきます。

【1回目のダラス行がロータリーにもたらした意味】
いざいざにしても、その時にロータリーの歴史が出たかどうかは別問題として、福島さんが翌大正8年の暮れに日本に帰って来て、その時にダラスロータリークラブのメンバーから東京にロータリークラブを作ったらどうかと勧められた。福島さんもやってみるかという気だったでしょう。それで、ロータリーの本部から東京にロータリーを作る権限を与えられた。

けれど、福島さんは、米山さんと会った当時35歳。帰って来たとき38歳になっているかいないかです。福島さんは、帰って来て三井物産副支那人という立場で、いわゆるサラリーマンです。また、それまでほとんどが海外生活だった。果たしてロータリーのメンバーを集められるかという考えがあったでしょう。それで、その権限をダラスで会った米山さんに託すわけです。

米山さんは、半半位の間に、これ以上のメンバーはないだろうという人物を集め、東京クラブを創立する。米山さんの高邁な思想、理想、そういうものが東京クラブに表れている。それがずっと大阪、神戸につながっていく。そして現在の我々のロータリーにもつながってくる。

そういう意味で、大正7年元日に米山さんと福島さんがダラスで会った。福島三三氏(大正8年)というのには日本のロータリーの原点ではないかという方があるわけで、私もそのとおりであらうと思っております。

【1回目のダラス行の目的】

それはそれでいいのですが、米山さんが一体なぜそのときダラスに行ったかという話になるわけですが、米山さんは、公務でアメリカに行っている。政府が派遣したミッションの委員であるわけですが、このことは、今回話を聞いて聞かれた部分で、公文書箱へ行って任命書や復命書なども見ました。

私は、政府の派遣したミッションがダラスに行って、



1917(大正6)年12月7日経育生産輸出協会の

日買田使節一行歓迎大宴会

なまたま三井銀行と三井物産ですから、同じ系列の会社の責任者の席へ着てみようかなというところで福島さんと会った位に思っています。ところが、このミッシェン、日買田委員長、「男爵日買田様太郎」によると、そのミッションは、ダラスまで行っていないのです。

それで、私とすれば、公務の日程がまわっていた。そのなかでなぜわざわざ一人ダラスまでという感じがあります。私は、アメリカ東部へ行かなかったことがないのでよく分かりますが、地味で見るとダラスまで直線距離で約2000kmあります。当時鉄道が発達したアメリカであっても、おそらく一昼夜かかっているでしょう。そうすると、むこうに1日いたとすると3日はとらなければならぬ。そんなにしてまで、なぜダラスに行きたのか、決して、趣い目的ではなかった筈です。

この疑問がまだ私にはわからないのですが、多分この疑問を解く直接的な資料はない。だから状況証拠から回めていくしかないだろうと思います。それでその状況証拠ですが、これを高そうと思つたらもう時間がなくなってきました。

三井物産と三井銀行、これは三井合名という持ち株会社、その下にある直轄の事業会社なわけですが、ある意味、三井系統に三井物産にすれば三井銀行というのは金庫番みたいなところだ。

金庫番に親類を挙げてご招待しなければいけないのが、三井銀行が三井物産に寄付をしていく資金量です。その程度であったかということですが、おそらく三井銀行の資金のうち1割から2割くらいの間かなという感じがします。三井物産は、その他にもっと取引が多い銀行もあるわけですが、例えば外国為替などでいえば、当時横浜正金銀行があって、三井物産の高層を引受けていた。その金額は大きいとすけれど、それについても7割近くを三井銀行が保証していた(価値1300

万円のうち700万円を三井銀行が保証)。
三井物産が棉花の取引について、ダラスで現地法人を作って取引をしていた。現地法人が現地の銀行からも借り入れをしていた。それについてもすべて三井銀行の保証が要求されていた。

取引の間両士との関係でもありますが、それ以上に三井物産になにかあつた。三井銀行が一平にすべてを引き受けるという情緒的な関係でもあつたということがいえます。もの本を眺めますと、三井銀行と三井物産は、一連托生の関係であるという表現を使っています。三井物産になにかあれば、他の銀行は手を出さないわけで、みんな三井銀行が引き受けるという関係であつた。

もうひとつは、三井物産の棉花取引の状況です。始めのうちは、インドでの棉花取引が主体だったので、アメリカの棉花にシフトされていきます。アメリカの棉花取引は、ご承知のとおりダラスが中心です。なぜアメリカ棉花という、色々理由があります。ひとつはアメリカの棉花の品質がよい、もうひとつはインドが当時本國のほうで高層管理を強化した。棉花の取引は、非常にお金がいるのだからです。四層取引ではなく、現地に現金を持って行って買付ける。つまり現金が要する。ですから高層を認められると現地に持っていくお金がなくなってしまう、という意味でアメリカにシフトしたということのようです。

当時の日本の棉花取引は、20%から30%位を三井物産がやっていたという状況もあります。また、三井物産の輸入商品の40%から50%が棉花だったということです。

それから、当時の国際情勢、第一次世界大戦が大正3年7月に始まり、日本もその8月にドイツに対して宣戦布告をしてドイツが持っている権益の背島を占領した。しかし、戦場はヨーロッパである。日本は苦戦は悪いですが、大東亜地帯的な意味で強かった。そして、棉花が当時国際商品になっていて、三井物産は、棉花を単に日本に持ってくるだけでなく、アメリカで買った原料をヨーロッパで売るといった動きをやっていた。それをダラスの現地法人がやっていた。そんなこんなで、三井物産の中で、棉花の取引額が非常に高くなっていった。

何年かが過ぎ、それまでアメリカは、モンロー主義で参戦しなかつたのですが、大正6年には大戦戦争の日鼻はついてきて、ドイツの敗色が非常に濃厚になつてようやく参戦をする。皆さんも記憶にあるかと思いますが、レマルクの「西前線無事なし」という本。ドイツが敗色濃厚となる丁度このころの兵士の間の戦況分を描いた内容の本ですが、そういう状況になつた。

そうすると、戦争が終わるといふことで、国際商品といわれている棉花の値段の暴落が見えてきた。大正7年頃です。ダラスで棉花が10日で30%低下がした。そうすると、三井物産のアメリカでの棉花取引の中心はダラスですが、一連托生の関係にある三井銀行の経営をあずかる常務の米山さんとして、気が持たずかなものがある筈が、そのころ三井物産は、三井銀行の3000万円というのがその一つだけですが、3000万というのは非常に大きい。当時の日本の貿易輸入額が15億(大7)くらいです。三井銀行の全輸入の輸入が50兆円くらいです。おそらく、三井銀行の全貸し出し金の1割を超えようという額ではないかと思つた。

それで米山さんは、政府派遣ミッションの公費の動向の日程の中で、正月の3日間の休み(日本風)を利用して、ダラスに行つてこよう。現地の棉花取引の状況はどうか、在米の銀行の状況はどうか、暴落への対応はどうか、直轄の責任者の話を聞きたいということだったのではないかと、このころの私のお考えです。これについて直接的な資料がなかなかないわけですが、こういうことではないかというのが私の結論です。

終わりになりますが、今回記念誌を作っていて、危うく裏を透れたことがあります。私の無智をさらさしうになつたことと、それはこの日誌の裏に米山さんが作つた米山家の由来を書いた本があります。表面の文章は、印刷物がありわかりなのですが、裏がどうなっているのを見ることがあります。昭和18年に書いたもので読みにくいのですが、私は、雲城(えいぎ)ということば、雲城とかお城という意味のことばを知らなかつた。それで雲(えい)という字が認められて、雲を雲だと誤り、雲城(とういぎ)と誤った。その後、青山学院に資料を見に行つたときに、青山学院の初等部の責任者の書いた手書きの原稿があつた。そこにはこの本の裏面の文章を書いたものがあり、このころが雲城とあつた。あつたのなかで叫んだわけです。危うく間違えるところ、どうにか勘弁かしらうとを指示しないでください。

これは、気がついて訂正できまされたが、この本のなかにも、気がつかない、とんでもない間違いがあるかも知れません。いくばく一生懸命やつたといつても、結果が間違つていければどうしようもないわけですが、記念館に連絡がつかなければよいと思います。

本題の内容が詳しくできず、中途半端になりましたが、ご静聴いただきありがとうございます。

超我の人 米山梅吉の足音

全国から記念誌読後の感想が
寄せられました。



温故知新

評議員 乾 昇

今春、米山梅吉記念館の35周年を記念して、「超我の人 米山梅吉の足音」が発刊された。

第1編「米山梅吉 その生い立ちと人となり(19歳)」、第2編「米山梅吉 そのロータリーとの関わり(54歳)」、第3編「米山梅吉の足音」の3冊も止められず、第3編「財団法人米山梅吉記念館の歴史(57歳)」を続けて読んでしまった。

今まで、兵の道徳など断片的に読み、かなり知っているつもりだったが、改めて「日本のロータリー」の真の起源を知り、米山梅吉が如何にロータリーに没頭していたかを知ることができた。当時のロータリーが現在のロータリーと異なるのは出典と書えようが、書き言葉を敬しるを知るべき歴史の書と書え。

最後の資料編を含め井口賢朝編集委員長の筆頭に高しうたいご苦労の方から敬意を表したい。

横田 光二

評議員 横田 光二

『超我の人 米山梅吉の足音』の、充実した内容に米山梅吉先生のお人柄と業績を学ぶことが出来たことに感謝いたします。

その中でも、後半「資料編」の「挨拶・講演」も非常に貴重な資料の集積であります。たとえば大衆クラブ創会における「友愛の無い尊厳は冷たい」また、「ロータリーにはServiceとFriendshipの二つは外に両方もない」とも同様に述べられています。と述べられた記録など、いずれも深く私の心に響きました。

日本のロータリー大辞典

理事 渡邊 守人

いさかひもなまききやの青田かな
米山梅吉記念館を訪れるたびに館に建つ歌碑に目をやる。

今まで、米山梅吉像に関する数多くの冊子を読み、その偉大な業績、立派な人柄に触れて、奉仕の精神を勉強し、理解してきたつもりであった。しかし、この辞典を読んでも、如何に偉大な、革新的な知識にとどまっていたことは恐ろしい。希望の体骨づけられたロータリーの集大成の「大辞典」が発刊された。

私達の心の糧である。

渡島 清夫

評議員 渡島 清夫

『超我の人 米山梅吉の足音』を読み終って、日本ロータリーの父としての20年、日本ロータリーの基礎を伸べたこと、一生の奉仕の足跡は、今も日本ロータリーの発展の源動力であり、この創立35周年記念誌は日本全国のロータリークラブで備えて、多くのロータリアンの教育参考資料として用いられるべきであると考えます。米山梅吉が特に次の時代を考案青少年奉仕に情熱を傾け、私財を投じて実行した記録は多く残されています。この誌を受けついでいきたいと思います。

掛水 俊彦

理事 掛水 俊彦

二度目のガバナートとして公式訪問中、熱誠の紳士的な対応が印象的。この生誕をこれほど大切に迎った記念誌はないのでは、日本ロータリーの創始者と呼ばれるのがよく分かる。

ロータリアンなら、彼の名前は誰しも知るところだが、経歴、人柄は殆ど知られていない。会員10万人を超え、自らで重要な地位を占める日本ロータリー、改めて彼の素直性、偉大さを認識する。出版に当たっての関係者のご苦労の心から敬意を表したい。

● 記念誌のお申し込みは (株)米山梅吉記念館へ



「点描 米山梅吉」の出版を終えて すべては「三人の侍」の話からはじまった

谷内 宏文 (川口 RC)

平成7年2月に、東京日本橋ロータリークラブに入会した際、新入会員は自己紹介を兼ねて「イニシエーション・スピーチ」なるものをする事になった。7つの顔では15分の話にする事は、30分間の間に、二人が話すのが恒例だということです。そこで、何を話そうかと考えた。

これはこの際、米山梅吉翁の創った三井信託銀行に勤かかせてもらった後輩として、翁の事を話さない事はないと思いついた。たまたまそのとき、三井信託では、翁の没後50年の節目を企画中で、そのために、あらためて翁に関する資料を渡りおこなっていたことも、私がそう思った原因のひとつでした。

ところで、話す相手は、ある程度翁のことを知っている人たちです。15分という限られた時間で、翁のことをより知ってもらうにはどう話せばよいか、ここはひと工夫が必要でした。

翁には沢山の顔があります。先ず、維新勤王の最中に生まれた武士の遺児・苦学留學生・ジャーナリスト志望者・文筆家・歌人・銀行家・信託業の創業者・政治家のオーブリアティーさらにはロータリークラブ・青山学院・三井信託等々の公益活動の先駆者等々。そんなことを思いついて、最初は、昔見た映画の片断

千草歳清する多福尻仲内に擬して「七つの顔の男」にしよかなあ、などと思ったりしました(段々が考えることが多いといつ笑ってしまいました)。翁もろまん、七つの顔では15分の話にする事は、30分間の間に、二人が話すのが恒例だということです。そこで、何を話そうかと考えた。

米山梅吉の最初の顔にした「三人の侍」というものでした。

翁を、実父和田竹道と油田成徳そしてがール・ハリスにしようって、世に出るまで、世に出るから、そのうえでの華仕活動の三つの流れにまとめてみてはと想ったのです。

この話は、その後、川口クラブに移ってからは、30分卓話にふくらみ、いくつものクラブで卓話の機会を得ることになり、当記念館の3年前の9月16日

の創立記念日でも話させていただきました。そして、この「点描」全体が、この「三人の侍」の情を大きくふくらませたもので出来たのです。ですから、あの日本橋クラブのイニシエーション・スピーチの機会がなければ、この本も、こういう形では生まれてこなかったでしょう。

この本を書くにあたっては、翁の伝記の決定版である佐々木邦の「創業と奉仕の一生」が書き切れない部分、特に翁の三井の時代、財政金融家としての事績を補充することに意を注ぎました。翁が多面的だっただけに、翁が歩んだ各時代それぞれに沢山の人の関わりを持っていて、それらの人々の関わりを知ること、その時代時代を知ること、翁の生き方を知ることが出来るのではと、そのことを述べたいがままに語ってみたいと思います。



推薦のごとは

谷内宏文著「点描 米山梅吉 日本ロータリークラブと信託業の創始者」(新風舎文庫)を推薦します。同著は三井信託銀行に勤めた著者が、日本に初めて新った信託業の米山の業績を専門の立場から詳述。更に三井信託、青山学院等の社会奉仕、慈善への奉仕に密着した米山の歩道詳しく伝えて頂ければ米山の業績の全貌が把握できると思っています。

米山記念館理事 内藤 成雄

『米山梅吉デー』について

長泉小学校長
戸枝 浩

あるものからお読みいただければと思います。
明治元年に生まれ、敗戦の翌年の昭和21年に亡く
なられた米山梅吉の生誕を学ぶことは、72歳まで私を
生かしてくれた、「日本」と言う国の一番身近な歴史
を学ぶ族でした。

「点讀 米山梅吉 日本のロータリークラブと
信託業の創始者」 谷内寛文 著
新風舎文庫 定価 800円 (税込)
TEL.03-3746-4548 FAX.03-5414-3484

この本が面白いかわける人たちとしては、主には、ロー
タリアン・銀行と信託の仕事に關わる人・いわゆる
三井グループの人そして青山学院の關連の方たちを
想定しました。そのため、すこし狭まった訳山のチー
マを感じることにになりましたが、それは、米山梅吉の事
績がそれだけ多くの分野にわたっていた結果である
ことは言うまでもありません。

また、もともとがいくつもの話の積み上げの形を
とりまので、それぞれは独立した話として、読
み切り出来る構成になりました。先ずは、ご関心の

創立35周年誌「超我の音」 正誤表

下記に誤りがありました。ご訂正をお願いいたします。

ページ	段落	行	誤	正
1	写真説明部分		昭和10年2月	削除
21	左	8	長崎県	佐賀県
35	左	20	昭和元年	大正15年
37	右	24	cont. over	don't over
44	横外 (注3)		昭10.01	昭34.02
53	右	4	Penetrations	Penetrations
147	誤示案3	7	INTERPRETAION	INTERPRETATION
152	右		伊藤正徳	伊藤正徳
165	右	下から13	其の外に	其の外に
170	右	36,38,43	解譯	解釋
170	右	46	興	興
171	左	40	起解	起解
173	左	23,28	勤め	勤め
174	左	14	其のクラブ	其のクラブ
179	左	30	善に興し	善に興し
183	左		誠恐	誠恐
186	左	11	機微	機微
188	左	19	若干の	若干の
188	右	20	語を拮たざる	語を拮たざる
189	右	10	修詞を為し	修詞を為し
190	右		若し之を	若し之を
192	右	8	日常生活	日常生活
192	右	下から14	軍備縮小会議	軍備縮小会議
196	右	28	北處	北處
212	右	下から14	Governer	Governor
214	左	18	employer	employee
217	右	6	武治五人	武治五人
218	左	本文 35	披露	披露
219	左	22	Benamat	Benamot
254	年表	年台16の欄	東京都	東京市
261	年表	年台70の欄	2月6日 [内地出生]	3月6日

町内の小中学校の児童生徒が、郷土の偉人で
ある米山梅吉翁を顕彰する『米山梅吉デー』の
取り組みは平成7年に始まったと聞いています。
今年度の長泉小学校の子どもたちはそれぞれ
の学年で次の箇所で汗を流しました。



- 1 年生—長小の中庭周辺の清掃
- 2 年生—長小のグラウンド周辺の草取り
- 3 年生—米山梅吉記念前駐車場の清掃と米山梅吉翁のお墓参り
- 4 年生—稲荷神社の清掃
- 5 年生—中土府グラウンドの草取り
- 6 年生—泉公園と地下道の清掃



こうした活動の主旨は、米山梅吉翁の遺徳を
しのぶとともに、次代を担う子どもたちにはボラ
ンティアの心を培うことにあります。

私が約30年前、長泉小学校に在職しておりま
した頃には、中庭の池の西側に図書館があり、
大庭下とその図書館を結ぶ渡り廊下の横に『米

山文庫』があったことを覚えております。
しかし、その当時はその『米山文庫』が十分に
活用されていなかったと言え、また子どもたち
に米山梅吉翁の業績を伝える機会もありません
でした。

私が米山梅吉翁の偉大さを知ったのは長泉小
学校を去ってからでした。明治から大正にかけ
ての沿革において大変に功績のあった江原新六
氏を研究する機会があり、調査をする過程で米
山梅吉翁の業績とその偉大さを併せて再確認し
たのです。そして、長泉小学校在職中に米山梅
吉翁のことをもっと調べ、子どもたちに教えて
おけばよかったですと後悔したものでした。



昭和6年 米山が寄贈した米山文庫

昨年4月に再び長泉小学校に赴任し、当時の
米山文庫はなくなっていました。年間計画に
『米山梅吉デー』が位置づけられ、校内には米
山梅吉翁や米山文庫のことを知らせる掲示物が
常設されておりましたことを大変うれしく思い
ました。

こうした米山梅吉翁を通して取組みが、子
どもたちが地域に根ざした大人として育つきつ
かけにもなると考えると、大変にすばらしいこ
とだと思いました。

これからも長泉町の誇る米山梅吉翁についで
の学習とその精神を受け継いだ実践を継続して
いくことが私たちの使命だと考えております。

平成17年度 定例理事・評議員会報告

平成17年8月28日、恒例の定例理事、評議員会が記念館において開催された。台風11号の影響も届付近は大したことなく、全国から遠路をわざわざ御出席の役員さんが成程の中熱心に御出席を下さった。大よそは執行部所属通りに可決され、有難いことであった。

本年は役員改選の年で表の表のごく新理事・評議員が選出決定された。

理事・監事・顧問

地区	職名	氏名	R	C	地区	職名	氏名	R	C
2500	常務理事	内藤 成雄			2700	監事	生沼 富博		
2510	常務理事	井口 賢明			2800	監事	大澤 健彦		
2520	常務理事	三浦 西三			2900	監事	藤本 功		
2530	常務理事	中村 賢明			3000	監事	藤本 功		
2540	常務理事	野村 賢明			3100	監事	藤本 功		
2550	常務理事	野村 賢明			3200	監事	藤本 功		
2560	常務理事	野村 賢明			3300	監事	藤本 功		
2570	常務理事	野村 賢明			3400	監事	藤本 功		
2580	常務理事	野村 賢明			3500	監事	藤本 功		
2590	常務理事	野村 賢明			3600	監事	藤本 功		

評議員

地区	職名	氏名	R	C	地区	職名	氏名	R	C
2500	北地区	藤田 英一			2700	北地区	藤田 英一		
2510	北地区	藤田 英一			2800	北地区	藤田 英一		
2520	北地区	藤田 英一			2900	北地区	藤田 英一		
2530	北地区	藤田 英一			3000	北地区	藤田 英一		
2540	北地区	藤田 英一			3100	北地区	藤田 英一		
2550	北地区	藤田 英一			3200	北地区	藤田 英一		
2560	北地区	藤田 英一			3300	北地区	藤田 英一		
2570	北地区	藤田 英一			3400	北地区	藤田 英一		
2580	北地区	藤田 英一			3500	北地区	藤田 英一		
2590	北地区	藤田 英一			3600	北地区	藤田 英一		

理事のうち理事長内藤成雄は再任されたが、常務理事伊藤文平が退任、非常務理事に井口賢明(昭津北)が新任された。氏はこの退任された「感徳の人 米山梅吉の覚書」の執筆者、幸甚士現職ながら心よく新常務の責務を担うしてくれていることになった。活躍を期待している。

収支会計については約1,600万円差の差支が提出され、通過した。常務は当20地区、神奈川2地区、米山梅吉会外の助成によるものだが、賛助会費、全国100円募金等の不特定多数を当り予算に基きなければならぬ不安定性が指摘されたが、さしての差支も名義もないまま承認された。新の入部費者は平成16~17年度は、678名、クラブ数は50であった。

提出された事業計画の夫よそは

1. 春、秋の定例祭の開催
2. 米山梅吉の覚書(案内、御出願光景的、移動同会の誘致、通関、案内マップの設置など)

3. 選挙、事業費の確保(簿記運動の継続)
4. 情報、発信(ロータリーの式、ガバナ一月信、記念館、研究会等)
5. 展示、出版録門(記念館別冊出版、特に「超我の人の米山梅吉の覚書」の版元決定)

であったが議決一致で決定した。熱心な一般協賛が行われた。主なものを1つを挙げる。近年アジアの国際間の親愛、交流がぎくしゃくしている。アジア地域からの留学生諸君、特に中国からの留学生に対しては財政援助に見合うロータリー、米山梅吉への研習が必要であり、そのためには記念館がその役割を果たすべきだとの声が数人から聞かれた。具体的には米山梅吉会が果たすべきことで互々それぞれの対策はあると思うが、今後は同僚長協賛は直に意見を交換し協力すべきだということ意見に賛同された。

以上理事、評議員会のあらましを申し上げます。

一100円の細い糸が館と全国を結ぶ一

全国1人年間100円募金運動 全国ロータリーアーンに向けて

財米山梅吉記念館

引続き展開中の運動です。既にご送金いただいた個人、クラブ、地区も相当ありますが、この運動は自分の間、事業費の不足をおぎなうために毎年度継続して行っております。クラブ単位、地区単位でご送金いただく方が便利ですが、勿論個人でも結構です。この運動も任意のご意志によってお願いしております。何卒よろしくお願いたします。

お申し込み、振込先
(100円募金)事業資金振込先
郵便振替口座 番号 00820-4-57730
財団法人 米山梅吉記念館

全国100円募金地区別表

平成16年7月~平成17年6月

地区No.	区集	地区	口数	地区%	収支	地区	口数
2500	68	北海道東部	4	2670	73	愛媛・香川・徳島・高知	13
2510	72	北海道西部	9	2680	74	兵庫	18
2520	90	岩手・宮城	5	2690	67	岡山・鳥取・島根	18
2530	63	福島	10	2700	59	福岡・佐賀・長崎	9
2540	43	秋田	9	2710	74	広島・山口	19
2550	50	栃木	6	2720	75	熊本・大分	8
2560	56	新潟	3	2730	64	鹿児島・宮城	4
2570	56	埼玉西北	12	2740	58	長崎・佐賀	7
2580	72	東京・神奈川	12	2750	90	東京・愛知・岐阜・山梨	4
2590	63	神奈川	13	2760	80	愛知	13
2600	58	長野	11	2770	84	埼玉南東	12
2610	65	富山・石川	6	2780	69	神奈川	15
2620	84	静岡・山梨	31	2790	85	千葉	27
2630	80	岐阜・三重	10	2800	57	山形	6
2640	76	大阪府南部・和歌山	16	2820	49	茨城	5
2650	94	福井・滋賀・京都・奈良	10	2830	43	青森	9
2660	86	大阪府北部	11	2840	47	群馬	4
合 計						369口	2,506,427円

賛助会費ご協力をお願い

理事長 内藤 成雄

新運営及び事業費の一部にあてるため、自主的な非営利により引続き賛助会員による賛助会費の運動を続けております。会費は、お一人年3,000円(1口)です。

個人でもクラブ単位でも結構です。何卒賛助会への入会をよろしくお願いたします。

お申し込み、振込先

賛助会費振込先
静岡銀行 下土狩支店 普通 0357598
財米山梅吉記念館 理事長 内藤成雄

米山梅吉記念館周辺の観光情報

紅葉時の桂橋
(12月初旬)

秋

【中伊豆 修善寺】

紅葉の季節、
辺りが一層情緒を増す
修善寺温泉の散策は
いかがでしょうか。
修善寺、秘湯の湯、
竹林の小径、赤柱公園・・・

お泊りは、修善寺よりお近くの
雲峰富士と正面に望む大仁ホテルを
ご利用ください。



竹林の小径

富士の眺めと温泉の宿

大仁ホテル



「ロータリー会館さま特別価格」一名さま
おとな一室、五〇〇円〜
三和会には、一名さまの宿泊・夕食・朝食・朝食
サービス料・消費税が含まれております。
入湯料は含まれておりません。
詳細はお電話にてお問い合わせください。
●お問合せ：ご予約は

TEL 05558(76)1111

米山梅吉記念館のご案内

開館時間

午前10時～午後5時 (但し11月～3月時は
午後4時まで)

休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日



米山梅吉記念館報

Vol. 6

発行日 平成17年9月17日
 発行者 財団法人 米山梅吉記念館 理事長 内藤成雄
 〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
 印刷 フタバ印刷株式会社